

英 語 科

齊藤 亜希子

端崎 圭一

山岸 律子

1. ESD の取り組みにあたって

本校の研究テーマを受け、英語科でもどのようなことを念頭に授業作りをしていくのか次の3点を確認した。

まず、教科の目標や育てたい力を第一に考えるということである。英語科の目標は「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」である。これを基本に各学年の教科の目標を生徒が達成できるような授業をめざすことにした。同時に、現行の学習指導要領の基本的考え方にあるように、各教科において育成する学力の重要な3要素の一つである「思考力・判断力・表現力等の育成」を重視していくこととした。

2つ目は、上記の教科の目標や思考力・判断力・表現力等の育成をめざしながら、ESD (Education for Sustainable Development; 持続可能な開発のための教育) の視点に立った学習指導を行っていくことである。その際に、持続可能な社会づくりの構成概念に関連させて、ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力などのどの能力・態度を育成するかを考えていくことにした。

3つ目は、他教科で扱っている教材を意識して、教材の「つながり」を考えながら指導していくことである。例えば、同じ題材の教材をどの教科でいつ扱うかを考えて指導することで、生徒の理解をより深めていきたい。また、同じ題材であっても違う教科で扱うことで、違う能力・態度を育成することにつながり、ESD をより統合的・複合的に指導することにつなげていきたい。

この様に、今年度の研究では英語科の目標や思考力・判断力・表現力等の育成を第一にすることを念頭に置きながら、ESD の視点に立った授業作りを行い、他教科との教材の「つながり」を考えながら研究を進めていくこととした。

2. ESD と学習目標

(1) 英語科で特に重視したい「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」

上記の英語科の目標を踏まえると、ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の中では特に④コミュニケーションを行う力を重視することになる。

しかしながら、それは教科の特性から指導の根底に常にあるものであり、ESD の視点に立った授業をする際にはそれだけでは十分ではないだろう。そのため、学年や教材に合わせて①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力のそれぞれの力を重視することも必要だと考える。

(2) 思考力・判断力・表現力と ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の育成について

学校教育法第 30 条第 2 項に「基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ」とあるように、思考力・判断力・表現力等とは英語科に限ったものではなく、各教科で育成するものを指す。

また、「学力に関する各種の調査の結果により、我が国の子どもたちの思考力・判断力・表現力等には依然課題がある。また、課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力や多様な観点から考察する能力（クリティカル・シンキング）などの育成・習得が求められている」（文部科学省、2011）からは、「思考力・判断力・表現力等」が「課題発見・解決能力、論理的思考力、コミュニケーション能力や多様な観点から考察する能力（クリティカル・シンキング）」と併記されていることが見てとれる。それは、上記の 4 つの ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の「①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力」の文言と重複するため ESD の視点に立った学習指導が思考力・判断力・表現力等の育成につながると考えられるのではないだろうか。

そこで英語科では、例えば 1 年生の“リサイクル活動”ではリサイクルのために自分ができることを考え「コミュニケーションを行う力」を、2 年生では“*If you Wish to See a Change*”では今後環境のために何ができるかを考え「未来像を予測して計画を立てる力」や「多面的、総合的に考える力」を、3 年生では“*Faithful Elephants*”で物語から戦争の歴史を考え、過去の歴史から学び建設的な未来のために「批判的に考える力」の育成を目指しながら、思考力・判断力・表現力等の育成を試みた。

これは、英語科で「コミュニケーションを行う力」は常に意識しながらも、生徒の発達段階や扱う題材に応じて育成する ESD を意識した能力・態度が変わることを表している。

(3) 他教科とのつながりについて

英語科では、上記の「コミュニケーションを行う力」ために、思考力・判断力・表現力等をより豊かなものに育成していききたい。そのために他教科で学んだ知識をもとにより深く思考しながら英語で文章を読み、より豊かに英語で表現できるような指導をしていききたい。その一方、英語科で学んだ経験が他教科で学ぶ際の刺激になり、他教科での関心・意欲・態度の向上につながるような指導も心がけたい。生徒がこれらの教科間のつながりを感じた際に、英語科はもちろん全ての教科を学ぶ意欲や学ぶ楽しさが生まれるのではないだろうか。これを目指し、他教科で学んだ知識と英語科で学んでいること、英語科で学んだ知識と他教科で学ぶことがつながっていることを感じさせる題材や教材の発掘や開発、指導を目指していききたい。

3. 学習内容とつながり

英語科ではコミュニケーション能力を育成する教科であることから、その教材が持続可能な開発のための教育に関する教材でコミュニケーションするための題材になりうるなら、どの学年のどの教科ともつながることができる。そのつながりは、同学年とのつながりだけでなく異学年とのつながりに広がることもある。下にその例を記す。

他教科とのつながりの例

1年

国際理解

- ・「国際フードフェスティバル」と1年技術・家庭科の家庭分野「食生活と自立」、2年社会「世界各地の人々の生活と環境」
- ・「Mike's Visit to Washington D.C.」と1年社会科地理分野の「北アメリカ州」、2年の社会科歴史分野の「欧米の進出と日本の開国」

環境学習（ゴミ）

- ・「リサイクル活動」と1年国語「江戸からのメッセージ」、1年数学「方程式」、1年技術・家庭科の技術分野「技術とわたしたちの生活」「設計」、2年社会「日本の諸地域」

2年

環境学習（気候変動、環境・自然）

- ・「If you Wish to See a Change」と技術・家庭科の1年家庭分野「食生活と自立」、
「身近な消費生活と環境」、3年社会科の公民分野「国際問題とわたしたち」、地理
分野「南アメリカの開発」

3年

平和学習

- ・「Faithful Elephants」と3年社会「第二次世界大戦と日本」、「国際社会と世界平和」

また、英語科の中でも学年を超えて同じ題材を扱うことがあれば、他教科とつながることもある。例えば、「リサイクル」がそれにあたり、1年と3年の英語はもちろん、複数の教科でも扱う題材である。これは何度も形を変えてその内容に触れることで生徒たちはさらに理解を深められるのではないだろうか。

4. 実践例

1年生の授業実践

1年生は Program4“リサイクル活動”，Program5“国際フードフェスティバル”，Program10“Mikes visit to Washington D.C.”（*Sunshine English Course* 1 開隆堂）の3つで実践を行った。

1年生は英語を学習し始める学年であることから、語彙や表現できることに限りがある。また、扱う題材もあいさつから始まり、深い内容は学年の後半で扱うことになる。そこで、本校の研究で焦点を当てた、ESDの視点に立った学習指導で重視される能力・態度の4つの能力の①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的、総合的に考える力、④コミュニケーションを行う力の中でも④コミュニケーションを行う力に重点を置いた。

特に英語を本格的に学習し始める1年生だからこそ、なるべく日本語を介してではなく生徒が英語で直接考えるように、多くの英語表現に触れさせることをこころがけた。また、既習事項を何度も活用する機会を設け徐々に深く思考し豊かな表現につながるように段階的な指導をした。

(1) Program4「リサイクル活動」

マイクと由紀が日曜の過ごし方について話している場面から始まる。そこから、リサイクル活動の話に発展し、みんなでそれに参加することになる。多くの資源を集め再活用し、結果的にはだれかの役に立つと考えられるリサイクルを題材とした教材である。

①〔指導計画（7時間）〕

第一次 日曜に何をするだろう。（2時間）

第二次 2つ以上のものについて言えるようにしよう。（2時間）

第三次 数をたずねたり答えたりできるようにしよう。（3時間）

②〔各時間のねらい〕

ア What を使った疑問文とその答え方を理解する。

イ 日曜日に何をするかを表現することができる。

ウ 2つ以上のものについての表現の仕方を理解する。

エ リサイクルのために何をするかを表現することができる。

オ 数をたずねたり答えたりする表現を理解することができる。

カ 集められたキャップがどうなるかを理解できる。

キ ペットボトルのキャップを集めることの多様な意味を考える。

既習の語彙が少ない1年生でもコミュニケーションできるように、授業と授業のつながりを意識し、前時の既習事項をなるべく活用して表現するような指導を目指した。Program4では、Program1, 2で既習の what を使った“**What do you do for recycling?**”に答えることを授業のねらいとした。

③ESDの視点

リサイクル活動に関しては、未来像を予測して計画を立てる力までとはいかなくても、未来を想像し思考するような指導を目指した。同時に、他者と協力してボトルキャップを集めることが資源保護につながることを通して、協力することが持続可能な社会へとつながる「連携性」を感じるように指導した。

また、ボトルキャップ運動に対しては、キャップを集めることよりもペットボトルを使用すること自体を減らす努力をするべきなのではという見方も紹介し、批判的に考える力や多面的、総合的に考える力にも関連した指導を試みた。

単元の最初には、授業当時に行われていたサッカーワールドカップでの日本人サポーター達による応援グッズを使ったスタンドのゴミ拾いの活動の紹介をした英語の記事“**Japanese fans were seen cleaning their part of the stand after the match.**”(World Cup Problems)を通して、その活動が他国からどんな風に見られているかを紹介した。そこでは、自分たちの良さ、他者と協力する態度や進んで参加する態度の大切さに対する気付きを促すような「連携性」や「責任性」を意識した授業を行った。

④他教科とのつながり

リサイクルに関しては、技術・家庭科の家庭分野では年間を通してどの題材を扱うときも関連させて扱うことになっている。また、技術分野では1年生の6月から始まる「もの作り」の初期段階において3Rの学習を行うことから、時間的にも同時期にリサイクルという題材を学ぶこととなる。社会では、2年の最初に、地理分野で世界から見た日本の資源・エネルギーと産業のところで「資源の活用と環境への配慮」について学習をしていく。英語科では3年時に5Rを扱った題材を学習する。1年生では、それらを学習する際に学びが深まるように、リサイクルについて理解する土台づくりをしていく。

(2) Program5「国際フードフェスティバル」

由紀と武史がインドから来た友達のバルーと国際フードフェスティバルに行く場面とバルーの家での場面を扱った教材である。ここでは、インドや韓国などの異文化理解を題材としている。

①〔指導計画〕(総時数8時間)

第一次 国際フードフェスティバルとはどのようなものだろう。(3時間)

第二次 バルーと国際フードフェスティバルを訪れよう。(3時間)

第三次 バルーの家族を知ろう。(2時間)

②ESDの視点

第一次の第2時では、ニューヨークのフードフェスティバルの様子の写真を見せながら多様性を意識して指導を行った。そこには日本のブースがあり、たこ焼きを売っている様子があった。そのたこ焼きはたこが入っているのではなくソーセージやチーズなどの現地の人たちにとってなじみのある食材の中から中身を選ぶものだった。その名前は **Teriyaki Ball** となっており、日本文化がその土地に適応してその土地で存在していることに注目した。ここでは、「相互性」や「連携性」に気付くことを意図した。また、たこはアメリカでは文化的背景のため、それほど好まれる存在ではないことも関係しているのかもしれないこと(多様性)を共有した。今後の世界で、多様な考えがある中 **Teriyaki Ball** のように、その良さを認めながらもその土地に合ったものに適応させていく柔軟さが大切なのではないだろうか。

③他教科とのつながり

この国際フードフェスティバルでは、と2年社会「世界各地の人々の生活と環境」で学んだ世界各地のさまざまな環境に適応することや1年技術・家庭科の家庭分野の「食生活と自立」の日本の食文化の豊かさにつながると考える。

(3) Program10 Mike's visit to Washington, D.C.

マイクがワシントン D.C. を訪れ、滞在先からの由美への手紙や訪問から帰国したマイクと由美の会話を扱った題材である。

①〔指導計画〕（総時数7時間）

- 第1次 過去にしたことについて言えるようにしよう。 (2時間)
- 第2次 過去のことをたずねたり答えたりできるようにしよう。 (2時間)
- 第3次 理由をたずねたり答えたりできるようにしよう。 (2時間)
- 第4次 小学校の時の先生 (ALT)に手紙を書こう。 (1時間)

②ESDの視点

政治の中心地であるワシントンD.C.には、ホワイトハウスや連邦議事堂などだけでなく、国立の世界屈指の博物館や美術館が多くある。アメリカというとニューヨークやロサンゼルスを思い浮かべるが、他にも個性あふれる魅力的な町があること、先住民の文化が今も継承されていることなど、米国の「多様性」に目を向けさせた。

11月の後半にこの課を扱い始めるため、英語にもかなり慣れてきていたので、英語で授業をする分量を増やした。具体的には、進出単語、文法説明、教科書以外の情報の提供のほとんどを英語で行った。これは突然ここで始めたわけではなく、少しずつ英語での授業に慣れるように、それまでも部分的に英語で説明するようにした。英語での説明の際は、なるべく内容を可視化して生徒の理解の助けとなるように心掛けた。

進出単語	文法説明（過去形）
	
説明の可視化	

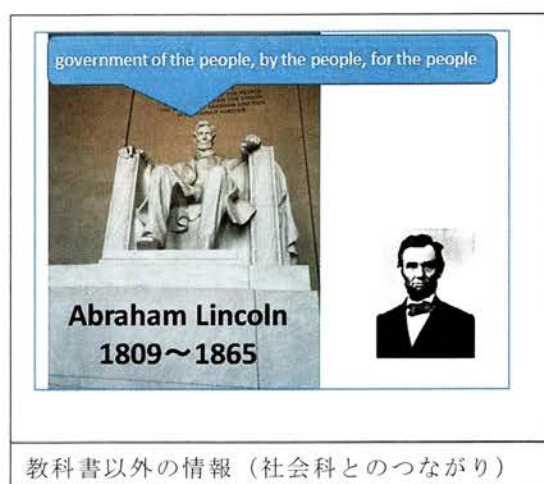
また、手紙文を扱っており、その形式を理解して実際に小学校でお世話になった担任の先生や英語担当教員、ALTなどのお世話になった先生に近況報告を兼ねてクリスマスカードを作り、送付した。生徒たちは、教科書には出てこないクリスマスカードや新年のあいさつに使える表現を積極的に使用する姿が見られた。また、小学校の先生に本当に送ったのかや返事が来たかなど、小学校の先生からの返事を楽しみにするような様子が見られ、生活の中で英語を使う活動になったのではないだろうか。これは、言葉での“コミュニケーションを行う力”はもちろん他人を尊重し“つながりを尊重する態度”の育成にもつながるのではないだろうか。ただ、この活動は時間も手間もかかるし、誰に書くかなど小学校での教員との人間関係とも関わっており、配慮が必要な場合もあり簡単ではなかった。



③他教科とのつながり

教科書本文にはアメリカ歴史博物館に訪れた様子があるので、ワシントンD.C.にあるリンカーンメモリアルやワシントンのことについて紹介した。生徒はリンカーンによる有名な言葉“government of the people, by the people, for the people”を知ることがとても楽しそうだった。

1年社会科地理分野では12月に「北アメリカ州」で工業・農業・生活文化・多民族多文化社会などについて学ぶので、英語科で米国の「多様性」に触れることで、その興味づけになればと考えた。また、2年の社会科歴史分野では11月に「欧米の進出と日本の開国」でアメリカ合衆国の独立や南北戦争を扱い、ジョージ・ワシントンやリンカーンなどについても学ぶので、その際に今回学んだことを思い出して欲しい。



2年生の授業実践

2年生の授業実践で扱った単元は、*Sunshine English Course 2*のProgram 7 “If You Wish to See a Change”で、題材は環境問題と貧困問題である。リオで行われた地球環境サミットに参加して「伝説のスピーチ」を行った日系カナダ人セヴァン＝スズキが、環境保護や貧困問題に関して、自分の信念について語るという単元である。

〔指導計画〕

- 第一次 セクション1 言語材料：動名詞 本文：セヴァン＝スズキの「伝説のスピーチ」要約文
- 第1時 動名詞の導入・練習（1時間）
- 第2時 セクション1の本文を読み、環境のために自分ができることを考え英語で書く。（1時間）
- 第3時 代表生徒の英語を読むことで、環境に関する英語表現を学ぶと共に、既習事項で自分の考えを表すことができることを学ぶ。（1時間）
- 第二次 セクション2 言語材料：SVC文型（V=look など）
本文：セヴァンの信念（世界の人々とのつながり）
- 第三次 セクション3 言語材料：SVOO文型

本文：セヴァンの信念（ガンジーの思いとのつながり）

以下、第一次の第2・3時の授業実践を中心に、ESD との関連、他教科との関連について述べることにする。

（1）単元の目標

2学年の最終目標として、「初歩的な英語を用いて、自分の考えなどを順序だてて書くことができる」を立てているが、この単元では、その中間段階として、「初歩的な英語を用いて、自分の考えを書くことができる」を目標とした。

まず、第一次第2時の学習活動・内容は、①～⑨の通りである。

- ①教師と英語で対話をしながらセヴァンの簡単な経歴を知る。
- ②本文の音声だけを聴いて、時と場所の基本情報を聞き取る。
- ③本文を黙読した後、未習語を教師に質問し意味を確認する。
- ④本文の概要を確認する。
- ⑤3回の音読練習をする。
- ⑥「伝説のスピーチ」の一部を YouTube で試聴する。
- ⑦本文に戻り、セヴァンの主張として重要だと思う文を抜き出す。

ア If you can't fix the environment, please stop breaking it!

イ We must change our lifestyles to save the animal and plants.（下線は執筆者）

ウ … she knew that we are all part of a big family.

⑧（上のイの下線部を受けて、）自分たちのライフスタイルが、今どうなっているのかを見直してみる。その際、衣（Clothing）、食（Food）、住（Shelter）、その他（Other things）の観点から1つ選び、マインドマップ【図1】を作成することで情報を整理する。

⑨ “What will you do to save the environment?” という課題を受け、マインドマップの中から環境保護のために、自分が何か出来る可能性のあるものに赤丸をつけ、日本語と英語で書く。（宿題）
上の⑦の活動では、正確な数は確認してはいないが、ほとんどの生徒はアとイの文を選んでいて、この活動は、シンプルであるが、生徒一人ひとりの思考・判断を促し、環境への意識を高める重要なポイントと位置付けて取り入れた。

⑧のマインドマップ作成において、中心の楕円に入れるキーワードを4つの項目から選択させた。網羅的に記入させるよりも自分の関心のあるところを集中的に掘り下げさせたいというねらいがあった。取り掛かって最初の5分間の様子を見てみると、書ける生徒とそうでない生徒がはっきりと別れるのに気がついた。そこで、いったん手を止めさせ、5W1Hを意識すると情報量を増やすことが出来るとアドバイスしたところ、書ける生徒が急増した。なお、昨年度まで本校の研究で、マインドマップを作成することは、思考力育成に有効であることを確認しているところである。

⑨の活動では、must, mustn't, can, should などの助動詞を用いると書きやすいとアドバイスを与えたが、いろいろなケースがあるので、特定の言語材料に限定して書くようには指示をせず自由に書かせた。なお、生徒が書いたものは週末に集め、全てを添削した。環境に関して何かを書くということを経験したことのない生徒なので、語彙や文法にかなりの誤りが見られた。しかしながら、こうした活動に少しずつチャレンジさせていくことが表現力の向上に結びつくと思う。

carry food. (添削あり)”と表そうとしたのである。

このように、教師が教科間で教材をつなげてあげることで、生徒たちの頭の中で、それらが有機的につながって、より深く物事を学べるようになっていく兆しを感じることができる。

また、社会科の各分野とのつながりもある。3年の公民分野の「国際問題とわたしたち」という題材では、地球環境サミットが扱われ、地球温暖化対策として自分たちでできることは何かを考えるコーナーが教科書に記載されている。さらに、地理分野の「南アメリカの開発」では、大規模な森林伐採に触れられ、開発と環境保護の両立が大きな課題として取り上げられている。このように、1年の家庭科→2年英語科→3年社会科で、環境について考える機会を生徒は持っているのである。

3年生の授業実践

3年生が取り組んだ単元は、Program 4 “Faithful Elephants” (*Sunshine English Course* 開隆堂) である。第二次世界大戦中の上野動物園で処分された象達の物語で、日本でも「かわいそうな象」という絵本で知られている。読む活動を通して、戦争についての考えを深めることのできる教材である。

昨年度の研究「表現活動と関連させた読みの指導」を引き続き行った。昨年度中間発表会の課題としては読むことの目的の明確化が挙げられたため、後期以降の取り組みとして、単元の最初の段階で最終目標を表現活動に掲げて取り組んだ。しかし意識調査の結果、生徒は最初に表現活動を目標に掲げているにもかかわらず、本文の内容を読む際にはそのことを意識せず、内容理解に意識を集中させていたことがわかった。そのことを受けて今回の取り組みにおいては「戦争について自分の考えを書く」という単元の最終目標を、単元の最初ではなく活動の直前に示すことにし、それでも書くときに読んだ文章の影響があるのか見ることにした。また、読む文章が物語文であるのに対し、書く文章は「自分の考えを書く」というエッセーのスタイルにし、読んだ文章からの表現の取り込みや、表現活動によって深まった考えが書く文章に見られるかどうかを分析することにした。

(1) 単元の目標

構成概念

VI「責任性」…戦争について考え自分の意見を持つことで、社会の未来を担い、安全で平和な社会を作っていこうとする。

能力・態度

批判的に考える力…戦争当時の動物園の物語を読み、社会の様子を客観的に見るとともに、登場人物のそれぞれの立場や心情を理解し、共感しようとする。

教科としてつきたい力（思考力・表現力・判断力）

外国語理解の能力…戦争当時の上野動物園の様子を描いた物語を読んで、飼育係たちや処分された象たちの心情を理解することで、物語の背景にある戦争の本質を理解することができる。

外国語表現の能力…本文を読みながら登場人物になりきって絵の吹き出しに入る言葉を書いたり、物語の途中からその続きを自分で考えて書いたりすることができる。又、「戦争について自分の考えを英語で書く」という単元の目標を持ち、最後にまとまった分量の英文（5～10文程度）を書くことができる。

(2) 単元指導計画 *下線部は書く活動

学 習 活 動	
1	<p>① 導入 プロジェクトで映された写真を見ながら現在の上野動物園の説明を聞く。</p> <p>② Oral interaction を通して上野動物園にいた三頭の象 の話を読むことを知る。単元の最終目標が「戦争とは何かについて自分の考えを書くこと」であることを知る。</p> <p>③ 本文全体を通して黙読し、ワークシートに書かれている質問に答える。 本文全体の概要をつかもう</p> <p>④ 答え合わせをする。</p>
2	<p>① P.45 ~p.46 に書かれていることについての理解</p> <p>② 音読練習</p> <p>③ 内容について質問に答える。</p> <p>p.45 What did the Army order the zoo to do? Why?</p> <p>p.46 Why did the zookeepers give John poisoned potatoes? How did the zookeepers feel that they gave John poisoned potatoes? 飼育係は何と言ってジョンに毒入りジャガイモを与えたのだろう</p> <p>④ ワークシートの吹き出しに飼育係の言葉を書く。</p> <p>⑤ 書いたものをペアやグループで交換して読み合う。</p>
3	<p>① P.47 に書かれていることについての理解</p> <p>② 音読練習</p> <p>③ 内容について質問に答える。</p> <p>Why did the two elephants do their tricks of raising their trunks high in the air? What did the people at the zoo think when they saw the elephants? p.47 の本文の続きを自分で考えて書いてみよう</p> <p>④ ワークシートに本文の続きを書く。</p> <p>⑤ 書いたものをペアやグループで交換して読み合う。</p>
4	<p>① p.48 に書かれていることについての理解</p> <p>② 音読練習</p> <p>③ 内容について質問に答える。</p> <p>What was in the stomachs of the two elephants? What did the elephant keepers think when they knew that? 天国にいるゾウと飼育員はお互いのことをどう思っていたか、それぞれの気持ちになって手紙を書こう</p> <p>④ ワークシートに、指示された立場で手紙を書く。</p> <p>⑤ 書いたものをペアやグループで交換して読み合う。</p>

5	<p>① ワークシートを交換してそれぞれ違う立場でゾウ，又は飼育員に返事を書く。</p> <p>② ワークシートを返してもらい，自分が書いた手紙に対する返事を読む。</p> <p>③ 現在の上野動物園の様子を書いた文章を読む。</p> <p>戦争とは何かについて考えよう</p> <p>④ 物語の感想を日本語で書く。</p> <p>⑤ 意識調査に答える。</p>
6	<p>① 「戦争とは何か」について自分の考えをイメージマップにする。</p> <p>② イメージマップをもとに「戦争とは何か」について英文を書く。</p> <p>戦争とは何か，自分の考えを英語で表現しよう</p> <p>③ 日本語で感想を書く。</p>

(3) 生徒の作品

吹き出しの文より

Sorry, John. I don't want to kill you. Because I love you and you are gentle-hearted. But the Army ordered the zoo to kill all the dangerous animals.

I don't want to kill you. But we have to follow Army's order. We can't get away. If we have a few more days.... Sorry.... Army's order.... Please die.

It's time to say good bye. See you, John. If we are reborn, we will be good friends.

Sorry, John. I must give you poisoned potatoes. Maybe, you can eat good potatoes. But, you will die someday. What should I do?

“What is War?” の作文より

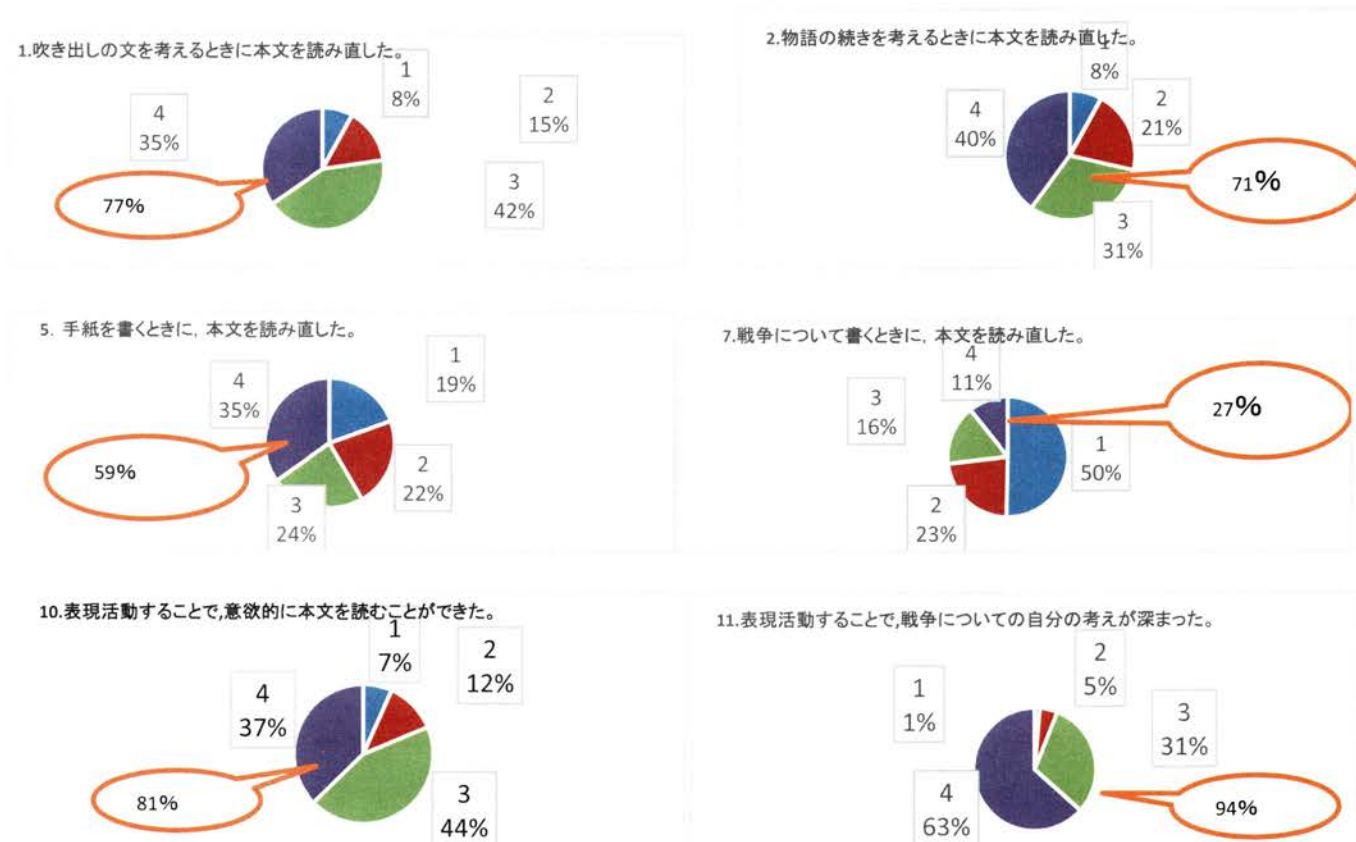
War harms even animals. For example, “Faithful Elephants.” In the story, elephants were killed by Army's order. I think when people saw the animals, they can relax especially at war. Animals didn't do any bad things. But they were killed by the war.

War's damage wasn't only people. For example, animals at zoo were killed by zookeepers. Zookeepers had to kill them or when bombs hit the zoo, dangerous animals will get away and harm people.

We can learn about the war's problem. We know war did great damage for many people and animals, and plants.

(4) PROGRAM 4 の後の「読むことに関する意識調査」

4 とても当てはまる 3 だいたい当てはまる 2 あまり当てはまらない 1 まったく当てはまらない



(5) 考察と課題

① 「表現活動と関連させた読みの指導」の視点から見て

上の意識調査の結果 1, 2, 5, 7 の数値の変化から、表現活動を重ねるごとに本文を読み直す割合が少なくなっていることがわかる。

1 の活動で本文を読み直したという生徒に「何のためにどこを読み直したか」という質問をしたところ、「飼育員（登場人物）の気持ちを正確に読み取るために zookeeper という単語の前後を読み直した」という回答が多数あった。表現活動によって単元の目標である「読むこと」すなわち外国語理解を促進させることがわかる。又、自分が書いたものと友達が書いたものを読み比べたりすることで、異なる視点で本文を捉え直すことができ、思考が深まることが考えられる。

2 の「物語の続きを考える」表現活動では、可哀想な象たちを救う物語を書くことを予想したのだが、実際は本文の結末に忠実に、加えて当時の社会の様子や登場人物の気持ちを細かく書いていた生徒が多かった。本文から離れることなく、その行間の部分を書き足していくという姿勢がうかがえる。

最後の表現活動として「戦争について書く」という課題に取り組んだときは7割以上の生徒が本文を読み直すことはしていなかったとある。しかし半数以上の作品の中には、人間だけでなく動物園の動物たちも尊い命を奪われたことに言及しており、戦争の恐ろしさを伝える裏付けとして用いられている。「読み直した」理由としては「文章や語句の確認」「戦争がどのようなものか確認したかった」「zookeeper の気持ちをもう一度読みたかった」など、戦争のイメージを本文からもう一度読み取ろうとする姿勢がうかがえる。「本文を読み直さなかった」理由としては「自分の考えを書きたかった」「何度も読み直し、内容はもう頭に入っている」とあり、本文の表現を自分のものとして用いている

ことがわかる。実際の作文を見てみると教科書に出てくる表現を文単位で書いているものが 145 人中 41 人，“animals”など語句単位で書いているものが 34 人おり、全体の 53%であった。

表現活動を重ねていく中で本文を読み直す割合が少なくなっていくことに関しては、徐々に本文の内容が頭の中に残り、読み返す必要がなくなりつつあった。様々な種類の表現活動をすることで、色々な立場で本文を読み直すことになり、本文の表現が記憶に残るといえることが考えられる。

物語を読む前に「戦争について自分の考えを英語で書く」という単元の目的を示したり、一時間ごとに確認したりすることで、本文の内容や表現が生徒自身の思考を裏付ける支えとなって、最終的な書く活動を充実させることができるのではないかと考える。具体的には、文レベルでの表現の取り込みが多くなったり、意識的に本文を読む割合が多くなったりということである。

② ESD の視点から見て

グラフ 10 により、表現活動によって意欲的に読むことができることがわかる。又、9 割以上の生徒が「戦争についての自分の考えが深まった」と答えている。ESD の視点で見ると、自分たちの意識が社会の未来を作り、その構成に大きく関わるという「責任性」を理解することにつながると考えられる。

④ 他教科とのつながり

本単元を学習する時期と近い時期に、国語科で戦争に関する物語「蟬の声」(浅田次郎『光村図書』)や詩「挨拶－原爆の写真によせて」(石垣りん『光村図書』)を読んだり、社会科で戦争当時のデータを元に客観的な視点で学習したりしている。異なった角度で戦争について考える機会を持つことにより、「批判的に考える力」を育成することが出来る。また何度も同じ題材に接することで、「戦争とは何か」と第三者的に見る視点から「自分はどうか考え、行動していくべきか」といった、主体的な視点へと変わることが期待される。今後の指導の課題としては、それぞれの教科担任が生徒の思考の流れを予想し、できるだけ多くの角度から思考できるような活動を考えることでさらに視野を広げることができる。

5. 成果と今後の課題

これまでの成果として、教師が ESD を介した教科間のつながりを意識して指導を行うことで、生徒の思考がつながることが挙げられる。例えば、2 年生で Program 7 If You Wish to See a Change を扱った時に、生徒から「1 年のときに家庭でやった」というような声が聞かれた。これは、同じ題材を違う教科で扱うことにより、何度も違う角度から思考する場面が増え、より深い思考・判断・表現につながることを表しているだろう。

また、どの学年の実践においても ESD を念頭においた目的意識を持って英語を使用するような取り組みができた。1 年生の Program 10 Mike's visit to Washington, D.C. では小学校の先生にクリスマスカードを書くことを、2 年生の Program 7 If You Wish to See a Change では、“What will you do to save the environment?” という問いに答えることを、3 年生では Program 4 Faithful Elephants で「戦争とは何か、自分の考えを英語で表現しよう」ということを最終目標に指導した。これらの活動はそれぞれ最終目標がはっきりしており、動機づけが明確で、多くの生徒が意欲的に取り組む様子が見られた。これは、これらの実践が思考を必要とする問題解決型の活動となっていたことがその要因だろう。

今後の課題としては、英語科としての教科の目標を達成していくと同時に ESD の授業を成り立た

せる題材や方法を開発していく必要があるだろう。英語科では教科書の題材によって、ESDに関する授業になるかどうかはかなり左右される。題材がESDに関するものでない場合に、ESDに関する授業を行うことに重点を当てると、それは英語の授業ではなくなってしまうだろう。学校が取り組む研究主題を大切にしながらも、英語科としてコミュニケーション能力を伸ばすための指導を充実させることができる題材や指導方法をさらに研究したい。

同時に、成果のところでも挙げた問題解決型の活動を取り組ませる機会を多くしていきたい。文法を身に付けるだけでなく、思考力・判断力・表現力等を育むように内容面に重点を当てた問題解決型の活動にこれまで以上に取り組んでいく必要があるということだ。この様な活動は、これまで内容面において、母語で考えることと英語で表現できることに差があることも多くあり非常に難しい面があった。しかし、教科間のつながりを意識した指導により、他教科で深く思考した内容を英語で表現していく必然性を生徒たちは感じているように思われる。生徒にとって高いハードルではあるが、そのような実践を行っていきたい。

カリキュラム面の課題として、教科間のつながりを考えてカリキュラムマップ作っているところだが、英語科の授業は教科書の題材によるところが非常に高い。それは、どの教科書を使うか、また教科書の改訂によって、ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度が変わってくるということだ。そのため、今後教科書の改訂により現在作成中のカリキュラムマップを変更していかなければならないことが予想される。2016年度に教科書の改訂が行われることになっているので早急に各学年担当で協力しながら、カリキュラムマップを完成させていきたい。

また、教科間の連携をより密にしていくことが最後の課題といえるだろう。それはいつどこでどの内容を行うかはもちろん、どのような内容を指導するのかを詳しく知ること、指導の内容がより深まると考える。1年生のProgram10 Mike's visit to Washington, D.C.では2年生の社会科歴史分野で11月に「欧米の進出と日本の開国」でアメリカ合衆国の独立や南北戦争を扱い、ジョージ・ワシントンやリンカーンなどについても学ぶということを念頭に置き、“government of the people, by the people, for the people”などの有名な表現を紹介した。2年生のProgram 7 If You Wish to See a Changeでは1年生の時に家庭分野「食生活と自立」で学んだことを受け指導を行った。その結果、家庭で学習した「地産地消」「フェアトレード」などの用語が、マインドマップに見て取れた。このように、どの教科でいつどのような内容を指導するかを知ること、次につながる指導や前の指導を受けた指導をし、相互に学習内容を深めていくようにしていきたい。

これらの課題のために、今後も教科内教科間の連携をしながら研究を継続し、次に生かしていく積み重ねをしていきたい。

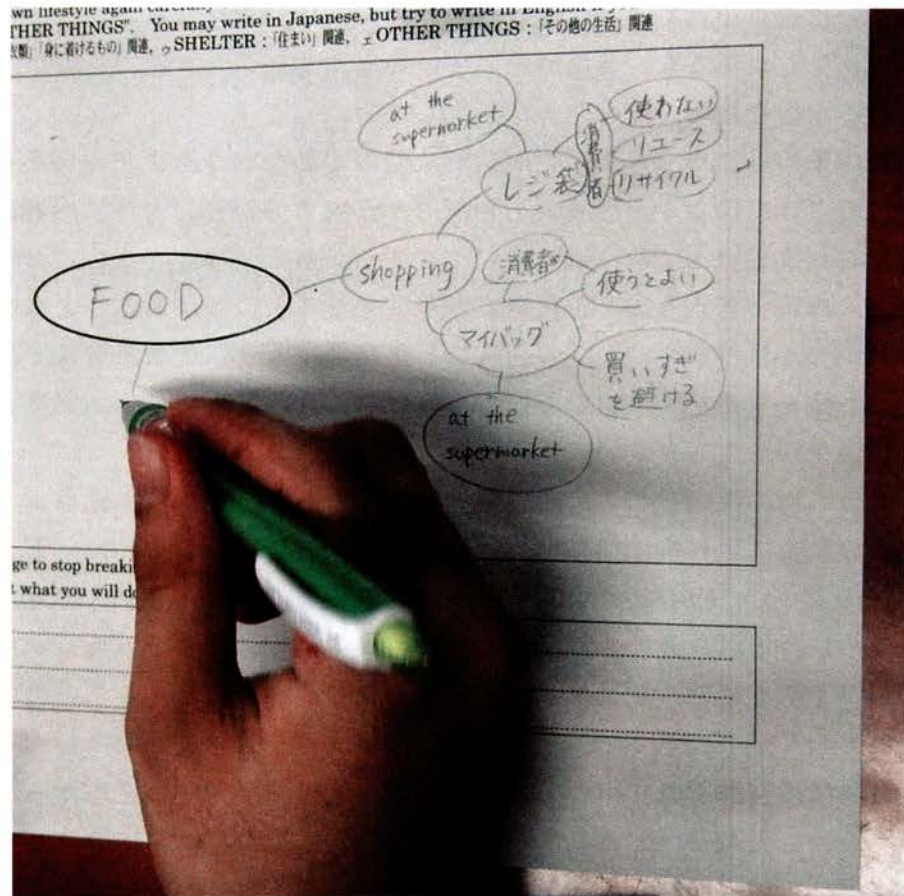
参考文献

国際協力国際教育交流政策懇談会（第1回）（2009），配付資料「グローバル化と教育に関して議論していただきたい論点例」

文部科学省（2011），言語活動の充実に関する指導事例集～思考力・判断力・表現力等の育成に向けて～【中学校版】

【資料1】

2年生授業の様子 (マッピング)



2年生 (生徒の作品)

What will you do to save the environment? に対する答えの例

I use too many lights in my house. I want to turn off the lights frequently. I must be careful.

We wash dishes. Since detergent is artificial thing, it is not good for the environment. But we need it to wash dishes. So if we use proper quantity, we can save the environment a little.

I mustn't buy too many clothes. I should recycle clothes. I mustn't throw them away easily to save the environment.

I must eat local food. Otherwise, we need much fuel to carry food.

I mustn't throw away food that I can still eat. I want to stop buying too much food and stocking unnecessary food. I should buy only necessary food to save the environment.